

### 土木学会100周年記念事業

### 「国際フォーラム：社会インフラの豊かな生活への貢献」

### 参加レポート



黒岩 正信

KUROIWA Masanobu

日本メックス(株)  
(本誌編集企画小委員長)

土木学会100周年記念事業の一環として開催された国際フォーラム（社会インフラの豊かな生活への貢献）が東京駅近くのJPタワーホール&カンファレンスで平成26年11月20日（木）の9時から17時30分の予定で開催された。東京駅も1914年（大正3年）12月20日に営業開始しているの、ちょうど100年である。会場ロビーからは東京駅が見渡せて（写真-1）、フォーラム会場としてとても良い場所に設定されていると感じた。



写真-1 東京駅丸の内駅舎

国際フォーラムはすべて英語で発表、進行され、同時通訳する形で開催された。議長は京都大学の小林教授が担当され、最初に土木学会・磯部会長、国土交通省・徳山技監の講演があり、その後海外主要学協会代表の講演があった。海外の講演は次の順番で実施された。米国土木学会・Robert D. Stevens会長、台湾（CICHE）代表・Nelson Nan-Sun Chou博士、オランダ王立工学院（KIVI NIRIA）名誉会員・J.K.Han Vrijling名誉教授、フィリピン土木学会・David G. Sanchez会長、英国土木学会・David Balmforth会長、韓国土木学会・Myung Pil Shim会長、インドネシア土木学会・Isawandi Imran事務局長、中国土木学会・

Li Young Sheng副会長、オーストラリア土木学会・Jeffrey R. Howard副会長、ベトナム土木学会Luu Duc Hai会長。

また、前日19日に開催された防災に関する第三回国際円卓会議の総括も参加者の短いコメントとともに行われた。円卓会議は、アジア地域で喫緊の課題である防災に関して、2012年に名古屋で第一回目、2013年にジャカルタで第二回目が開催されたのに続いて行われたものである。

磯部会長は我が国の土木事業の100年を振り返って話をされた。治水、砂防、港湾、鉄道を中心に発展してきたが、中でも土木学会50周年の1964年東京オリンピックに向けて新幹線、高速道路、東京モノレールなどが開通した頃が高度成長期の最盛期に当たり、その後新幹線は乗客の死亡事故ゼロを継続中で正確で安全な交通手段であることを説明された。関東大震災や70年代の公害、成田・関西・中部の各国際空港の開業、明石海峡大橋等の本四架橋などのビッグプロジェクトと環境問題などを含めて説明された。東日本大震災については、ハードとソフトの両面からみた防災計画を検討しており、ICTを活用した柔軟な対応もできるようにしていきたいという話であった。

徳山技監は、日本列島は世界の23%の巨大地震が発生する場所にあり、東日本大震災時の東北地方整備局長として、「櫛の歯作戦」と呼ばれた道路啓開を地元のゼネコンとの事前協定に基づいて通信が途絶した中で実施したことを説明された。また、台風災害でも洪水で2～3千人が亡くなる時代（50～60年前）があったが最近では少なくなっていると説明された。東京の一部エリアは海面や河川よりも低いところに、街があるとの説明もあった。現在90%以上が利用しているETCの導入で高速道路の料金所で発生していた渋滞は解消できた。東京の4つの環状線を完成させて、慢性的な渋滞を解消していくために料金体系も検討して

いきたいと話された。

米国の話では、ハリケーン・カトリーナによる洪水が印象的で、Flood Risk Management (Call for a National Strategy) がホームページからダウンロードできるということであった(写真-2)。また、個別の社会インフラ毎にどれくらいの投資を行うとうまく維持管理できていくのかという予算が定量的に分析されているのも印象的であった。

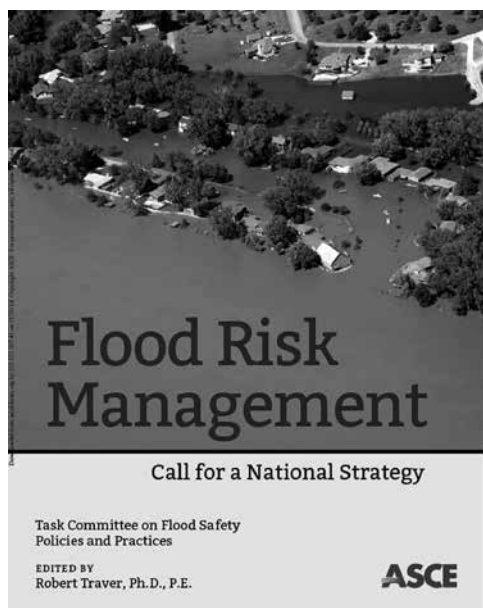


写真-2 洪水リスクマネジメント

ちなみに、米国土木学会は1852年設立で14万人超の会員がいるようである。

オランダは、ダムのところには街ができたので、アムステルダム、ロッテルダムと語尾にdamと付く街が多いそうで、土木の仕事はマズローの五段階欲求説の下から二つ目の安全を確保することだと説明された。(マズローの五段階欲求説：①生理的欲求②安全欲求③社会的欲求④承認欲求⑤自己実現欲求)

英国土木学会は1818年に設立されており、もうすぐ200年になるが、会員8万人が150か国にいる。200

年前と現在では、土木に対するミッションは変わっていないのではないかと。すなわち、社会の要請に応える課題を解決してゆくこと。世界中で洪水のため約9千万人が避難している。一度洪水の被害にあった人は、休日でも天気が心配で家を離れられなくなるし、夜中でも雨が降ってくれば心配で寝ていられなくなる。国際化のためには、その国の文化の違いを理解し、その地域の言語や価値観を活用して優先順位の付け方なども考えて一緒に仕事を進めなければならない。そして失敗を恐れずイノベーションを進めていく必要がある。

台湾では、八田與一さんが1920～1930年に渡って烏山頭ダムの建設と農業利水事業に大きな貢献があり今でも多くの国民が感謝しているという話があった。

参加各国のいろんな事情があり、土木事業が進められていることがよく理解できた。地球温暖化の影響なのか、全般的に洪水の話がいろんな国の発表に含まれていたのが、印象的であった。

円卓会議の結果は、2015年3月14日～18日の期間に東北仙台で開催される第三回国連防災会議に向けて整理し、各国政治家に理解してもらい予算を確保し防災を主流化していく必要がある。また、個別の発表で印象に残ったのは、スロベニアで今年の2月に発生した寒波で大停電が発生し、周辺国から発電機などの支援をもらったというものであった。ネット上には、森や市街地のいろんな物が氷に覆われている写真が多数あり、送電線や鉄塔が氷の荷重に耐えられなかったのがよく理解できた。この氷河期を思わせるような寒波に襲われれば、どこの国でも同じような状況になるのではないかと怖くなる思いであった。

なお、翌日11月21日に開催されました土木学会100周年記念式典において、磯部会長が「土木学会創立100周年宣言」を公表されたので、土木学会HPに、「土木学会創立100周年宣言」「社会と土木の100年ビジョン」(あらゆる境界をひらき、持続可能な社会の礎を築く)がダウンロードできる形で掲載されています。